

車社会到来を予見

第6部 陶磁器を世界へ〈9〉

時流の先へ

中部財界ものがたり

出して「自動車用点火栓トシテ完全ナルモノ」とお墨付きをもらおう。

しかし、全国発売する直前に二、三個の不良品が見つかる。江副はすぐに発売をやめる。「何もやめな

くても」。社内から上がった声を江副はねじ伏せる。「その一個の不良プラグを買った立場からすれば、不良率は100%だ。

均一性の欠けた商品売るわけにはいかない」研究に研究を重ね、三〇

年にとやっと「NG点火栓」を世に出す。ただ、日本では外国製品への信頼が厚く、自動車保有台数も伸び

ないまま、プラグ販売はなかなか増えない。そこで江副は三四年、販売の第一線に立つ。六十台

の自動車を持つ海軍省に売り込もうと、佐賀で同郷の軍令部次長、古賀峯一(故人)を頼る。航空本部長の山本五十六(故人)に話を

つないでもらい、プラグ三で日特の初代社長に就く。三十七年に完成した名古屋市

そのころ豊田自動織機自動車部(現トヨタ自動車)や日産自動車も自動車生産を始め、三菱重工業や中島飛行機なども大量生産機の試作に乗り出し、プラグ需要が増え始める。大発電所の建設ラッシュでがいし生産も膨らみ、日本碍子は繁忙を極めたため、三六年に点火プラグ部門が「日本特殊陶業」(日特)として独立した。

南区の工場で「NGKスパークプラグ」の本格生産を始めた。

四一年に太平洋戦争に突入すると、軍部は創業時の十倍も点火プラグを増産しろと命令する。技術屋で粗製乱造をひどく嫌う江副は、軍の監督官にかみつ

き続ける。「あんた方は、軍艦に新入りの水兵ばかりを乗せて戦争ができますか」

とつとつ海軍省は、親会社の森村組(現森村商事)首脳部を呼びつけ「江副社長を辞めさせなければ、軍需会社の認可を与えない」と言い渡す。

江副の孫で名古屋市瑞穂区に住む嘉彦(六も)は「軍需工場から外されるとい

うのは会社にとって死活問題。それでも孫右衛門は品質を重んじた」と祖父をたた

える。四四年四月、森村組傘下の日本陶器、日本碍子、日特の三社が軍需会社にそ

ろって指定される。翌五月、良品主義を貫いた江副は日

特社長などあらゆる役職を退いた。(文中敬称略)

江副孫右衛門(えぞえ・まごえもん)1885(明治18)年、佐賀県有田町の陶磁器製造業の父八蔵の長男として生まれる。1909年に東京高等工業学校(現東京工業大)窯業科を卒業し、日本陶器に入社。19年に設立された日本碍子の工務部長に就く。36年に日本碍子から分離独立した日本特殊陶業の社長となり、39年に日本碍子社長に就任。44年にすべての役職を辞任した。47年有田町長に就き、49年辞任。同年に東洋陶器(現TOTO)社長となり、労働争議で揺らぐ同社を再建した。63年に東洋陶器会長。64年に79歳で死去。

生産量は週に百五十万個。自動車も、やがてこの域に達することは間違いない。そのときに外国製のプラグをつけて走っていたら、窯業技術者の恥になる」江副は翌二一年早々に、日本碍子で点火栓(プラグ)の研究にかかる。二六年には陸軍飛行学校に試供品を



晩年の江副孫右衛門

「この国にはそんなにプラグの需要があるのか」その日がたまたま日曜日だったことが幸いする。技術者に拒否されることもなく、守衛が工場の要所をくまなく案内してくれた。当時の様子は作家小出種彦(故人)の著書「江副孫右衛門」に詳しい。江副は自らに言い聞かせる。「日本の

プラグ製造 品質重視貫く